

第34回 夏期福音特別集会 (1) (箱根)

キリストの天国

——マタイ伝第5章1～48節——

1987年8月21日

小池辰雄

何もない者は恵福だ その世界に入っていく 無の恵福輪(山上の大告白の図) 霊の貧しき者
悲しむ者 柔和なる者 義に飢え渴くもの 愛憐ある者 心の清きもの 平和ならしむる者
義のために責められたる者 無 その通りです! 人助けの愛 海の塩 キリストの光 私の
中に入ればそれができる 一切の秘訣をえたり 天の父の愛なるが如く 万物は愛に飢えてい
る 貧者の一灯

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言
うときは、汝ら幸福なり。 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。 汝等より
前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

13 汝らは地の塩なり、塩もし效力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
は用なし、外にすてられて人に踏まるのみ。 14 汝らは世の光なり。山の上
にある町は隠ることなし。後は用なし、外にすてられて人に踏まるのみ。
15 また人は灯火をともして升の下におかず、灯台の上におく。かくてともし
びは家にあるすべての物を照らすなり。 16 斯くのごとく汝らの光を人の前
にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん
ため
為なり。

17 われ律法また預言者を毀つために来れりと思ふな。毀たんとて来らず、



反つて成就せん為なり。18 誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一点、一面も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。19 この故にもし此等のいと小さき誠命の一つをやぶり、且その如く人に教うる者は、天国にて最小き者と称えられ、之を行い、かつ人に教うる者は、天国にて大なる者と称えられん。20 我なんじらに告ぐ、汝らの義、学者・パリサイ人に勝らずば、天国に入ること能わず。「ただ然り、然り、否、否と言え」……

38 「目には目を、齒には齒を」と云えることあるを汝ら聞けり。39 されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝るとかある、異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」

● 何もない者は恵福だ

「恵福なるかな、靈の貧しき者よ、天国は汝らのものなり」(私記)

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。」(マタイ5:3)

「幸福なるかな、貧しき者よ、神の国は汝らの有なり。」(ルカ6:20)

ルカ伝の方が、

「貧しき者よ、神の国は汝らの有なり」

と非常に簡単なんです。この「汝ら」というのがキリストの本当の言葉でしょうね。マタイ伝の方が少し整っている。もつともキリストは、二人称であろうと三人称であろうと自由にお使いになったでしょうから、何もそういうことにこだわることはない。どっちだつていい。ただ我々が読むときは、三人称であつても二人称にしなければ読めない。我々に語りかけ、しかも「我々」にでなく「我」に、一人一人に語りかけている。一人称・単数・現在・直説法、これが福音の世界です。

「貧しい者」とは、物質的には持ち物が無い、精神的にもやはり何もない。要するに

「何もない者は恵福だ」



ということ。私はこのみ言葉に驚いている。これは私の賜った福音の根底なんです。

「恵福なるかな、霊の貧しき者よ、天国はお前のものだ」

という。私は自分で霊なんか貧しくなれません。死にいたるまで罪びとにすぎない、しようがない者です。けれども、

「恵福なるかな、わが十字架によって、汝、霊貧しくされた者よ」

と。これは、キリストからそう言われたら、もう文句ないです。

「私の十字架は、お前の過去現在未来の、我というものを、我執というものを、みな処分した。これが私の十字架だ」

とおっしゃる。これに誰か文句言えますか？

●その世界に入っていく

私は、皆さんと語りながら、その世界に入っていく。皆さんもぜひ入っていくください。

「先生はそうですか」

なんて、ダメだよ、そんなのは。

「私もそうです」

と言えなくては。

この無は悟りの無ではない。十字架から賜った根底にある無我の世界です。人間小池はどんなにガタガタしていても、そんなことは問題でない。そんなことを問題にするような十字架ではない。

皆さん、これを本当に受けとってください。今、ぶつ倒れてもいい。そのようにしてキリストに本当に無我の中に入れられたら、そこには何が射して来るんですか。聖霊の他にないではないですか。聖霊の他に入ってくるものはない。

「聖霊とは何か？」

もヘツタクレもない。本当に十字架を受けとれば、聖霊は侵入して来ざるを得ない。全身を貫かざるを得ない。もう、世界中のクリスチャンが何と言おうと、私はこれを否定するわけにはいかん。

「十字架」しよくざい 「贖罪」しよくざい

という命題をただ観念的に信じるのではなく、また頭や心でなく、全身で本当に受けとってください。聖書の世界は全身一如の世界ですから。

「霊の、肉の」

と言っているのではない。この御霊から離れるわけにはいかない。

一人の存在がかけがえない。

「全世界を得るとも、その生命を失わば何の益かあらん」

とキリストが言われた。



「この霊的な生命の一を全世界のものと比較して、その一の方が重い」と言う。これは成り立たない論理です。逆説的なものです。

九十九匹をそつちのけにして、迷える一匹の羊を捜し求める神さまだから。そのように、「あなた方一人一人は、その一人が欠けても天国は成り立たない」

という、それくらいの存在です。何をしてでもいい、そういう存在ですから。比較研究はひとつも要らん。神さまの方から大調和を成してください。

「幸福なるかな」

の「さいわい」という字はもともと

「恵まれたるかな」

という意味です。ヘブライ語の「アツシユレー」、ギリシア語の「マカリオス」と言う字です。キリストはもちろんヘブライ語でお話しになった。

●無の恵福輪（山上の大告白の図）

「幸福なるかな、心の貧しき者、悲しむ者、柔和なるもの、義に飢え渴く者、

憐憫ある者、心の清き者、平和ならしむる者、義のために責められたる者」

と、八つあるからこういう図が自然にできた。まんなかに

「無」

がある。そのまわりに、

「霊貧、悲哀、柔和、渴義、愛憐、清心、平和、受苦」

がとりまいてる。そして、それぞれ草花と色と預言者にたとえた。

一、**霊貧**。「霊の貧しき者」というと、すみれを思い出す。草のかげに咲いている小さな**葎**、宇宙の涙みたい**な葎**。色は無色です。預言者でいうとゼパニヤです。

二、**悲哀**は、ききようを思い出す。紫色。これは星みたいな形だ。預言者ではエレミヤです。

三、**柔和**はやさしいなでしこ。ピンク色だ。大和撫子。預言者では第二ゼカリヤです。

四、**渴義**は「義に飢え渴く者」、これは烈々たる色をしている。ひまわり。太陽の光に向かつてグルグル回っている。色でいうと銀色。預言者はアモス。

五、**愛憐**。「憐憫ある者」は愛の世界ですから、紅のバラだ。預言者でいうとホセアです。

六、**清心**は「心の清き者」。これは大空、真っ青な空。花でいうと白ユリだ。山ユリみたいなもの。エゼキエルです。

七、**平和**。「平和ならしむる者」はコスモス。葉は非常にきれいな緑だ。これは色からいうと緑。ゼカリヤです。

八、**受苦**。「義のために責められたる者」は金色だ。「義に飢え渴く者」は銀色で、こつちは金色になる。桜は何も金色ではないけれど、「花は桜、人は武士」といって、これは潔く散ってしまう。己の命を捨ててしまう。これは桜、日本の象徴的な花だ。預言者では第



二イザヤです。

キリストのみ言は全部、旧約の預言者が集中している、焦点です。特にイザヤ書は、一番キリストはお読みになったと思います。

● 霊の貧しき者

3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。

この「霊貧」は、

「霊の貧しき者、わが十字架によつて霊の貧しくされた汝」

ということ。これは旧約聖書のゼパニヤ書2章3節に、

「³すべてエホバの律法を行うこの地の遜るもの。汝らエホバを求め公義を

求め謙遜を求めよ。さすれば汝らエホバの怒りの日に或いは匿るることあら

ん。」(ゼパニヤ2:3)

遜るもの、謙遜なる者、心の貧しき者、その貧しさをもう少し徹底すると、ヨエル書になる。ヨエル書2章13節、

「¹³汝ら衣を裂かずして心をさき、汝らの神エホバに帰るべし。彼は恩恵あり

憐憫あり、かつ怒ることゆるく、愛憐大にして災害をなすを悔たもうなり。」

(ヨエル書2:13)

「心を裂く」ということ。謙遜という心もさいてしまうような、まったく平伏しの姿です。

そして、「神に帰れ」という。預言者は誰でもみんな

「神に帰れ」

と言っています。我々にとつては「神」でなくて、「キリスト」ですが、キリストに帰らなければどうにもならない。帰って、中へ入って行く。帰入する。キリストに帰入する。それは祈りの世界で、全存在をもつて。祈り入る、祈入する。帰入、祈入しなければダメだ。私の祈りは早い。十字架の門を通つてすぐにキリストの中へ入ってしまう。キリストが

「この門から入れ」

と仰る。キリストの門です。他の門ではない。十字架という門を通つてキリストの中へ入る。平伏して入る。大手振つて入るのではない。全身をもつて、

「ありがとうございます」

と言つて入って行く。そうすると、持ち前の心は裂かれてしまう。新しい心がそこに湧いて来る。「心」と言おうが「霊」と言おうがいい。

福音は、ポイントをしつかり掴まえないと、いつまでたつてもダメです。

「聖書をどう解釈したか」

そんなことはどうだっていい。解釈学なんて、余計なことをやっている。

「恵福なるかな、霊の貧しき者」



とは、

「食のごとく霊の貧しいことだ」

とマルチン・ルッターが言った。

「有れども無きがごとし」

ということですよ。

我々が持っているものは、どんなものであろうと、公有であろうと私有のものであろうと、これはもともと全部、神有しんゆうです。神さまの有ものですから。

「これは私のもの」

なんでもものは有りはしない。みんなこれは神有で、授かったもの、お借りしているものです。向こう側へ行く時、何か持って行けますか。私は聖書は持って行きたいけれど、聖書も持って行くわけにいかない。無手勝流でいかないと。聖霊だけは持って行ける、魂のなかに。聖霊だけは持って向こう側へ行く。

それが、霊の貧しいと言うこと。この世界は無色です。いろいろな色が有るけれども、もとは無色なんです。無色は無限色なんです。色が無いということは、無限の色をそこから生み出す可能性を持っている。

水は味が無い。ところが、この水によっていろいろな味ができ上がってくる。なんと云ったって、空気と水は素晴らしい。空気を瞑想し、水を瞑想するだけでも、福音の世界に入ってしまうわけだ。

無即無限無量の色を現わしているものは虹です。七色ではない、あれは無限の色がある。太陽の光がプリズムで屈折すると、そこに虹ができる。本当に素晴らしい。

人間は自然を尊重し、自然に親しまなければダメなんだ。人類は自ら自然を害して、みずから滅びて行くような道を今たどっている。おそろしいのは原子爆弾ばかりではない。とにかく、人間というものはそれほど救い難いものだ。お釈迦さんやキリストが出てきたわけだ。けれども、日本人は

「まあ、宗教はちよつと…」

と言つて、ちよつと敬遠する。日本では福音を受けとっている人は少ない。右を見ても左を見てもいない。

皆さん、みんな伝道者ですよ。一人、二人と、直々の伝道をしてください。集会なんかしなくたっていいから。直々の一対一の伝道、一対一が本当なんです。そのためにはみ言が化体していなくてはいかん。御霊が、そこに本当に躍動していなくてはいけません。でなければ、ただ言葉では一対一の伝道はできない。本当の深い愛は力をもっている。人を救い上げる。感情的な愛ではない。

私の兄貴は死をもって、私に対する一対一の伝道をした。それで私は目が醒めた。

「耶蘇教はちよつと…」



なんて私は思っていたからね。もう、60何年たつけれども、いよいよ兄貴は私に近い。私は死に至るまで、この兄貴の弔い合戦ですから。本当は死ぬはずの兄貴ではなかったんだ。どうぞ、そういう一対一の伝道をしてください。数ではない、質なんだ。キリストの本当の弟子は幾人いるんですか。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ。4人ではないですか。それらによって、福音書なんか書かせられている。マタイもマルコもみんなその弟子だ。パウロは書かせられたけれども、第一流の人間というのは大体あまり書かない。明治維新の第一流の人間はみな仆れた。日本の政治を執つたのは二流だよ、伊藤博文であろうと。吉田松蔭、佐久間象山、坂本竜馬、高野長英、そういうようなひとはみな殉道の死を遂げた。

● 悲しむ者

4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

「悲哀」といえば、旧約で思い出すのはエレミヤです。預言者エレミヤ、これは涙の預言者です（小池辰雄著作集第九巻『感想と紀行』の「涙の泉」の項参照）。

エレミヤ記9章1節、

「ああ我わが首を水となし、わが目を涙の泉となすことをえんものを。わが民の女の殺されたる者のために昼夜哭かん。」（エレミヤ9:1）

南ユダの国の滅亡の時に、その夕暮れに現れ、国と一緒に滅びたのがエレミヤです。彼は、「バビロニアには抵抗するな。これが本当の愛国だ」

と言った。エレミヤというのは深いハートの預言者です。イザヤとエレミヤというのは旧約の双璧だ。預言書はよく読んでください、特にイザヤ、エレミヤは。何回読んでもいい。新渡戸稲造は『ファウスト』を百回読んだという。我々は聖書を読むのに百回どころではない。ただ回数を重ねることがいいのではないけれども。私のこの聖書はボロボロになって、三冊目か四冊目の聖書です。

この頃の口語訳の聖書は、どうも私は感心しない。あなた方は文語は嫌いかい。神さまに、「あなた」

と言うのはいいけれども、神さまの方から「あなた」なんて言われると、くすぐったくてダメだよ、僕は。「汝」か「お前」の方がいい。私の訳は文語にちよつと口語調がまじった文体です。

● 柔和なる者

5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

その次は「柔和なる者」。これは、ゼカリヤ書9章9節、

「シオンの女よ大に喜べ。エルサレムの女よ呼われ。視よ汝の王汝に来る。彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗



るなり。」(ゼカリヤ9:9)

キリストは柔和にして、柔和なる驢馬に乗つて来た。

「自分は柔和なる者」

と、キリストは別のところで言つておられる。キリストはもちろんだた柔和ばかりではない。英雄中の英雄だ。本当の人間というものは、そういういろんなものを渾然^{こんぜん}として持つている。福音の世界は、何を見ても、何を読んでも、どんなマイナスの経験をして、全部それをプラスに変えることができる。それはもう大変なもんだ。福音というのはいわゆる神学でケリがつくようなものではない。

● 義に飢え渴くもの

6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

次は「義に飢え渴くもの」。義のことを言っているのは預言者アモスです。アモス書5章24節に、

「²⁴公道^{おおやけ}を水のごとくに正義^{ただしき}をつきぎざる河のごとくに流れしめよ。」(アモス5・24)

とある。また、神の義はものすごい審判^{さばき}を持っていることが9章に書いてある。そして、その義を求めると。

● 愛憐ある者

7 幸福なるかな、憐憫^{あわれみ}ある者、その人は憐憫を得ん。

その次は、「愛憐^{あわれみ}ある者」。これはホセア書です。ホセア書6章6節、

「6 われは愛情^{いづくしみ}をよろこびて犠牲^{いけにえ}をよろこばず。神をしるを悦ぶ^{よろこ}こと燔祭^{はんさい}にまされり。」(ホセア6:6)

預言者の宗教は実存的な宗教ですから、いわゆる宗教的な儀礼的なことではない。いくら犠牲を神さまに捧げたつて、そんなものはダメだ。大事なのは本当に人を憐れむことだということなんです。

それから、ホセア書2章19～20節は有名な所です。

「¹⁹われ汝^{めと}をめとりて永遠^{とこしえ}にいたらん。公義^{ただしき}と公平^{おおやけ}と寵愛^{いつしくみ}と憐憫^{あわれみ}とをもてなんじを娶^{めと}り、²⁰かわることなき真実^{まこと}をもてなんじを娶^{めと}るべし。汝エホバをしらん。」(ホセア2・19～20)

神さまとイスラエルとの関係が、夫婦の関係、あるいは主従の関係、あるいは親子の関係といろいろありますけれども、要するに相手がどうであろうと、変わらざる愛をもつて貫くというのが、エホバの神さまに言われているところの啓示の愛、上からきている愛です。愛は、恋愛であろうと、夫婦愛であろうと、親子愛であろうと、友情であろうと、師弟



の愛であろうと、全部これは上からきている。全部、神さまからきている。そうすれば、愛はどんな愛であつても健全です。

ゲーテはその角度なんです。ゲーテという人は、いわゆる

「アガペー、フィロース、エロース」

だのと分類はしない。観念的に割り切るのはダメなんだ。本当の世界は或るひとつの中心からグーツと展開して来る。それはもちろん深い愛で、第二イザヤのエホバの僕の歌の

「義のために苦しめられる者」

と相通じます。これは犠牲を取らない。子羊をほふつて犠牲を捧げるのではなくて、自身犠牲となる。キリストがそれを実行されたわけだ。イザヤ書の53章はもう言うまでもない。

●心の清きもの

8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

その次は、「心の清きもの」。ゼカリヤ書13章1節、

「その日罪と汚穢けがれを清むる一の泉、ダビデの家とエルサレムの居民きよみんのために

開くべし。」(ゼカリヤ13・1)

「清き泉」です。それから同じく、清い水が神殿に流れているというのがエゼキエル書に出ている。エゼキエル書36章25～27節、

「25清き水を汝らに灑そそぎて汝らを清くならしめ、汝らの諸々の汚穢けがれと諸々の偶像を除きて汝らを清むべし。26我新しき心を汝らに賜たまい、新しき霊を汝らの

うちに賦さずけ、汝らの肉より石の心を除きて肉の心を汝らに与え、27わが霊を

汝らのうちに置き、汝らをして我が法度のりに歩ましめ、わが律おきてを守りてこれを

行わしむべし。」(エゼキエル36・25～27)

水で清めるといふことはもう旧約でも有る。エリヤ、エリシヤの時にもあつた。心が水のように澄んでいるわけだ。それは霊が貧しくなると心は澄む。澄むと同時にまたものすごい内容を持つて来る。

私たちの目は曇っていない。だから、褐色のものは褐色に見える。白いものは白く見える。これは目が澄んでいるからです。色メガネなんか掛けていたらダメだ。澄んでいるから、形も見えるし色も見える。澄んでいる世界は多様なものを全部引き受けてしまう。全部入れてしまう。澄んでいるとは、カラッポでそれでおしまいではない。澄んでいるから、何でも認識できる。また、それを入れて、包摂ほうせつしてしまふ。

これが「心の清きもの」です。そこには神さまが映ってくる——神さまは映らなくていい——心が澄ませられる。自分で澄むのではない。さっき言ったとおり、十字架ですつとばされると、心が澄むから、そうすると見えて来るのは、キリストなんです。キリストが



見えてくる。

「恵福なるかな霊の清き者、汝はキリストをみる」

このキリストの内容は無限無量だから、楽しくてしょうがない。

「神を見ん」

ではない、

「キリストを見ん」

と直したらいい。

「なかなか私は神さまが見えませんが」

なんて。幻で妙なお爺さんを見たってダメだ。ミケランジェロは余計なものを描いた。ああいうお爺さんは描かなければよかった。心が澄むと、福音書のキリストが見えてくる。

● 平和ならしむる者

9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。

「平和ならしむる者」。平和ならしむる者は、神さまとの、キリストとの関係が平安でなければダメです。そうすると、平和ならしめることができる。神さまとの、キリストとの関係がちゃんと立っていることです。

「われ汝の中に、汝が中に」

が平安の世界です。「の中に」でなければ平安は来ない。キリストの中に、入らなければ。そうしたら、今度は本当に人を平和ならしめる。平和ならしめるというのは平安を与えるということだ。

「このキリストの平安をあなたにも分けてあげましょう」

ということ。それでなければ、本当の平和は来やしない。人にも平安を与えることが、それが「平和ならしむる者」です。いわゆる「平和運動」なんかダメです。これも、ゼカリヤ書8章5節、12節等に出ている。

● 義のために責められたる者

10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。

11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。

12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

次は「義のために責められたる者」。

「…喜び喜べ。…預言者たちもそうであった」

と。これが第二イザヤの特に53章はそれにあたります。その他いくらでも有ります。



「義」とは何ですか。神さまのみ意（こころ）を行うことが義である。ただ関係がついているくらいではダメです、み意（こころ）を行わなければ。だから、義というのは観念ではない。愛も観念ではないように、義も観念ではない。聖書の言葉は観念ではない。ところが、いわゆる神学はみんな観念だ。そんなもの説明したつてダメなんだ。

義人とは神のみ意（こころ）を行う者。義とはその行っている事態を義という。

「義を見て為（せ）ざるは勇なきなり」

なんて、孔子（こうし）が言ったけれども、あれはまだ観念の世界だ。本当に義を見れば、義ならざるを得なくなる、行ぜざるを得なくなる。それが本当の義の世界です。思われている義は義ではない。福音というのは、そこまでの具体的な世界ですから。

福音の世界は本当にそこに生きていなければ力が来ないし、生きていれば力が来る。それは事実が証明する。説明は要らん。告白するだけ。おいに告白してください。そして人の告白を聞いては、皆それが参考になって

「そうだ、そうだ」

と響き合う。それが大事なんだ。福音の世界は証言が大事なんです。

●無

それで、八つグルーツと回った。この八つあるのはいつたい、何でまとめるんですか？ まん中に私は「無」と書いた。無というのはもともと

「天蓋（てんがい）の下に廿、廿の林」

という字です。即ち、「大空の下の四十の林の木」が数えられるかというのと、数えられない。「無」は即ち「無数」を表す。私はこれには驚いた。漢字というのは素晴らしいなあと。「無数」「数が無い」というのは「数えられない」ということ。「無数」なんていう言い方も素晴らしい。だから、十字架を受けると無限無量なる聖霊がやってくる。無即、無限無量とはそのことです。

その「無」が中心で、そうすると、このような八つの事態がみんな自然に身に付いてくる。これを

「無の恵福輪」

無の恵まれたる輪と書いた。

しかし、この八つの事態が本当に身に付くためには、十字架を負わなければダメなんです。十字架されて無になった者は、十字架を負うところの使命を持っている。また、栄光を持っている。十字架を負うところの力が来ている。それは聖霊だから。力んだつて、十字架は負えません。人のために、本当に縁の下の力持ちになること。誰もが嫌がることを本当に喜んでやること。いろんなことに出くわせば、逆に力がやってくる。これは本当です。聖霊は行き詰まりを知らない霊ですから。この福音を受けとった人は、一人一人がそれだけ



の力を持っている。

「まだなかなか力がありません」

ではない。あなた方は無力でいい。

「無力の時に無限力となる」

ということですよ。

「自分の側の力がどれだけある、聖霊がどれだけ来たか」

なんて思い測ったってダメだ。いつも空っぽです。

「信仰なんか有りません」

といったような世界。バカづらしている。

「けれども、ドッコイ」

という世界です。

●その通りです！

それが山上の大告白の私の告白です。このみ言ことばを読んで、それが自分の中に本当に力と
なって、現実となってきたら、本当に読んでいるということだ。

「そうですか」

では、いつまでたつてもダメ。

「はいっ、その通り(アーメン)です！ 私は義に飢え渴いています。貴方という義

に飢え渴いています。必ず、貴方は私を満たしてください」

とはつきり言える。

柔和であろうと、苦しみ、悲しみであろうと、それらをものすごい喜びをもって担になえる。

「喜べ、喜べ」

とあとでキリストは言っているでしょ。

「本当にうれしいよ。天界でお前たちは本当に喜びの人になる。いや、実はもう地
上でもって悲しみの中にありながら、本当の喜びを持っている」

と。この福音の世界は、一番深い悲しみを持つ人は一番高い喜びを持っている人なんです。
ただ、

「ワッショイ、ワッショイ」

と喜んでたつてダメだ。人の苦しみを、悲しみを本当に自分のものとしていくようなこと
でなければ。

我々をとおして聖霊が働いている。御霊がくれば働かざるをえない。私自身が驚いている。
幾人そのようにして助けたかわからない。私の兄貴たおが仆れたのもそのためだ。

そういうことで、中心は、十字架で無を賜ると、今度は、本当に十字架を御霊の力で負
えるような人になってくる。そして、人に幸いを与え、ひとを活かして行くということですよ。



● 人助けの愛

その一つの例として、こういう話がある。それは小学校の若い女の先生だ。村人が大いに騒いでいるから、何ごとかと思つて、川原の方へ行つたら、二人の自分の教え子が倒れている。川で溺れてしまった。水は吐かせられていたけれど、もう心臓は止まっていた。お医者さんが、もうダメだと言つた。そうしたら、その先生は——まだ二十歳ちよつとの女の方だ——自分の衣を脱いで半分裸になつてこの二人の子供を抱いた。自分の体温で暖める。そして、10分、20分とたつた。そのうちに一人の子供の手足が動き出した。死人を蘇よみがえらせた。これは本当に、具体的な愛の世界だ。本当に愛をもつてそのように行動に出れば人を助ける。これはエリヤ、エリシヤがそれをやつた。七度もその子供の上に重なつて暖めてやつて祈つた。あれも蘇よみがえつた。

もう一つの話は、東北の白石という川で、やはり子供が三人溺れた。その時、女の先生が着たまま飛び込んだ。これは少し無理だつたけれども、二人は助け上げた。三人目にとつとう力尽きて、その三人目の子供と一緒にこの先生も死んでしまった。子供は助からなかつたけれども、しかし、その先生の行為に親は深く感謝したということだ。

いろいろな例があるでしょうけれども、私たちの中にキリストの愛がそのようにして働けば人を助ける。愛は最大の力ですから。

● 海の塩

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之これに塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。

14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。

15 また人は灯火ともしびをともして升ますの下におかず、灯台の上におく。かくてともし

びは家にあるすべての物を照らすなり。

地の塩、世の光。塩で一番大事な現象はどこにあるか。海です。ここは「地の塩」と書いてあるけれども、海の塩です。とにかく不思議でしょうがない、あの大海のどこの海の水も塩辛い。そして、そこに魚がたくさん住んでいる。陸に持つてくれば塩と水を分析できるとは、海の中に有るときには、これが塩ですといえる塩の姿がない。

姿がなくてその中に溶け込んでいる在り方が本当の在り方なんです。我々クリスチャンは何者でも無い。けれどもドッコイ、これは本当の塩辛さを持つている。その界限を腐らせない。自分の回りを本当に腐らせないような人、これが塩だ。しかも、溶け込んでいる人には見えない。

「私は信仰を持つてゐるぞや」

なんて、そんなきらびやかな宣伝がましいことは一つも要らん。

「あの人はどこか違うな。何か違うな。引かれるな、何だろうな」



と、それでいい。それが伝道の第一歩かも知れない。時には、はっきり言います。伝道の姿はいろいろですから。とにかく、溶けているというこの姿が非常に大事だということ、私は「地の塩」よりか「海の塩」と言いたい。

●キリストの光

「塩」がもし義ならば、「世の光」は愛です。暗いところを明るくする。電気を消せばみんな闇だ。けれども、闇を除くのでなくて、闇の世界を光の世界に変える。どこに光があるかではない、全体が明るいんだということ。太陽がそうです。昼間がそうです。雲があっても明るい。光は熱を持っている。要するに、

「汝らは、地の塩、海の塩のごとくに義であり、ともしび、光のごとくに愛であれ」ということ。これは、もちろん、キリストを受けとらなければ、そうは成れません。

「我は汝のうち在りて光となる。汝のうちなる光である。もう影は無いよ」

と言うことです。内側から光がくるから影がない。外から光が来たら影ができてしまう。うちなる光です。うちなる塩です。溶けてしまっている。

要するに、全部これは身に付いているんだ。「身に付く」とは良い言葉だ。からだに付いている。存在に付いている。何でも、からだでやらなければダメなんだ、全存在で。頭だけでも、手足だけでもダメなんだ。

16 斯くのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を

見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。

「善き行為」という。キリストはよく

「行為、行為」

とおっしゃる。「信仰」という言葉より「行為」の方が多いいのではないかな。今の多少むずかしい言葉でいうと、「実存」だ。在り方、在りよう、生きざまです。その人を誉めたってダメなんだ。

「見て父を崇める」

とキリストは言われた。父の栄光が現れているというわけだ。普通の人には皆その人をただ誉めている。その人において神の栄光が現れていることを、それを見なくては。

●私の中に入ればそれができる

17 われ律法また預言者を毀つために来れりと思ふな。毀たんとて来らず、反
つて成就せん為なり。

18 誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一点、一画も廃ること
なく、悉く全うせらるべし。

19 この故にもし此等のいと小さき誠命の一つをやぶり、且その如く人に教う



る者は、天国にて最小いときき者と称となえられ、之を行い、かつ人に教うる者は、天国にて大なる者と称えられん。

20 我なんじらに告ぐ、汝らの義、学者・パリサイ人に勝まさらざば、天国に入る
こと能あたわず。

これもそうです。「汝らの義」というのは、義がいかに行為であるか、ということですが、実力を持った義であるかということが、これでもわかる。学者・パリサイ人は義のことはよく知っている。答案を書くとき満点の答案を書くかも知れない。満点の答案ではダメなんだ。十点でもいいよ、本ものなら。

「頭の答案はいくらであつても、お前たちの義は本当の義だ。私が神さまを現じているように、私を現じなさい。祈つて、み意こころを受けとつて、直ちに即、実行しな

さい」

ということ。うれしいね。マルコ伝の即、行の世界と、ルカ伝の心の深い世界と、このマタイ伝の言だけでも、言が単なる言葉ではない。

それから、モーセの十戒のことをここにキリストが持つて来て、

「ただ殺すなかりではない。兄弟を憎んだらダメだ。ただ姦淫するなかりではない。女を見て色情をおこしたらダメだ」

と。キリストの道徳の世界は深いから、内面の世界だから、誰も及第できない。キリストは我々にできないことを、水を割らずに仰る。ということは、

「私の中に入れば、それができるようにする」

ということ。福音はそれだけのなし。

「入らなければダメだ。私と一つになるまではダメだ。一生懸命で練習したつていい。鍛えたつていい。しかし、それはまだ本当のところではない」

と、こういうわけです。

●一切の秘訣をえたり

「いつわり」のことも書いてある。それはダメだと。

「ただ然しかり、然いり、否いな、否いなと言え」

と。

38 「目には目を、齒には齒を」と云えることあるを汝ら聞けり。

これもダメだと。キリストは、旧約の律法の世界を、もう一つ奥の方で全部満たして、外側を破ってしまった。

「律法の一点一画も滅びない」

なんて仰るけれども、あれはちょっと妙な言葉だ。本当の意味では、

「いわゆる一点一画の世界ではないんだ」



というわけです。それで本当に天衣無縫的になる。

39 されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。

と。無抵抗の本当の力。そういう生き方をしたのはガンジーだ。インドのガンジーは偉い。ここにこして、とうとうインドを独立させてしまった。愛の権化のような人です。

40 なんじを訴えて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。

41 人もし汝に一里ゆくことを強いなば、共に二里ゆけ。

42 なんじに請う者にあたえ、借らんとする者を拒むな。

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。

旧約にこの言葉はない。けれども、何かそういう言葉が他にあつたかも知れませんが、要するに聖書には出てない。

44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。

45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。

これはすごい。責めようが迫害しようが、何であろうが、とにかくそいつらを救うために祈る。救うために、サタンから取り返してやるために。それを拒めば仕方がない。拒む方が悪いんだから。

「豚に真珠を投げるな」

という言葉がある通り、福音はそうたやすく、何でもかんでもというわけではない。キリストのみ言葉は平面に置くと矛盾したような言葉がありますが、しかし、決して矛盾してゐるのではない。その時その場において、キリストのこの言葉がピタリという、そういう多面性をもっている。要するに、いかなる事態に対しても行き詰まりを知らないような境地に入る。パウロが

「一切の秘訣をえたり」

と云うのがそのことなんです。

「こういう場合にはどうか？ ああいう場合にはどうか？」

なんてなことをしよつちゆう詮索していたら、福音の世界に入れない。中心を一つ掴めば、自然にだんだん解けていってしまふ。

●天の父の愛なるが如く

45 天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正

しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。

これは素晴らしい言葉です。

「あいつは少し悪い奴だから、日の光を少し薄くしてやろう」



なんて、そんなわけではない。全部同じように与えてくださる。一視同仁という。問題は受ける方なんです。受ける方が拒んでみたり、いい加減にしてみたり。恵みは、もうやって来ているんだ。太陽の光が照っているのに、わざわざ戸を閉めているようなものだ。開けて外へ出ればいい。

こういうのを、

「父のこころ」

と言う。相手によって区別はしない。問題は、相手が自分で区別しているだけのはなし。自分で自分を裁いているだけのはなしです。

我々は相対的な人間だから、誰でも彼でも同じように愛するといったって、それは無理だ。そんなことをしたらぶつ倒れてしまう。それぞれが、それぞれの場所でもって、それぞれにふさわしいように、神さまが会わせたり、

「これを救ってやれよ」

と仰つたりしてるわけだ。それを、はずさずにやって行くだけのはなしです。だから、一対一なんです。「この時この場において」というわけです。それで、

46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、しゆげいにん 取税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、いほうじん 異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、まった 汝らも全かれ。」

という言葉で、この第5章が終わっている。キリストの山上の大告白の中の最大の言葉です。これはルカ伝では

「父の慈悲なるがごとく慈悲なれ」

と書いてある。「全き」というのは、

「全くするものはただ慈悲だ、愛だ。父の愛なるが如く愛なれ」

ということ。キリストがまったたく父の愛の権化となっていた。

●万物は愛に飢えている

本当の生命は愛をもっている。愛を持たない生命は生命でない。愛を持たなければ、何年生きたってダメなんだ。いつたお休れてもいいんだ、本当に愛を持っていれば。

「二日は千年、千年もまた一日」

という。

「愛は永遠をもなお短しとする」

という言葉がある。ドイツの詩人の言葉です。愛にとつては永遠もなお短いという。

いかに万物は愛に飢えているか。その愛を、神さまは、キリストは、大自然は、かく与えているのに、なぜそんなに喧嘩するか。20世紀の世界は妙なすごい兵器をだんだん造つたりしている。制限したり交渉したりして、ちよつと表はよさそうだけれども、裏では何



をやってるか、わけがわからない。いつわりの平和だから。本当に大政治家が、

「戦争はもうよそう」

と、本当に腹を割って握手をするようなことではなかったならダメです。政治家というのが一番悪いんだ。これはあの偉大な政治家のグラッドストーンが言っている。本当の政治家は——いわゆる政治家を突き抜けた人です——滅多にいない。それだけの迫力を持つためには、聖霊が来なければダメなんです。政治家の中に、キリストを、お釈迦さんを生きるような人物が出て来なければダメなんだ。いわんや、教育者もそのとおり。

皆さん、勃勃たるものが湧いて来たでしょ。この地上の生命を本当に燃やし尽くしてやろうと。運命環境なんかどうだっていい。み霊の力は突破して行く。み霊の権威、み言葉の権威を本当にキリストと一緒に、使徒たちと同じように身に体する。だから、私は使徒的信仰と言っているので、その証人があなた方の中からだんだん出ていただかなければ。数ではない、質です。一人一人が一对一の伝道者になってください。

●貧者の一灯

「世の光なり」でこういう話もあった。阿闍世アジャヤセという王様が、お釈迦さんの話を聞くのが好きで、みんな連れて来てよく聞かせた。お釈迦さんの話がだいぶ長くて夜遅くなる。それで、帰りに、お釈迦さんも道がわからないといけないというわけで、灯火ともしびを持って来て道案内をする。ところが、ある晩のこと、灯火が風にあおられて皆消えた。ところが、ただ一灯だけが消えなかったという。その灯火は、一番貧しい老人が心を込めて作っていたともしびであった。それは風にあおられても消えなかった。お釈迦さんは、

「本当に心のこもった一灯は、いい加減な方灯よりも尊い」

と言ったという話です。「貧者の一灯」という話です。

このように、一人一人が本当にキリストを宿した灯火ともしびとなり、キリストの溶けた塩となる。その時に、父の全きまっつたというものが、完全性というものが、そこに在る。我々人間は有限なものです。とても完全なものではない。しかし、完全性がそこに宿ってくる。三日月でいい。しかし、それは必ず満月と成る。欠けていく月ではない。上弦の月である。我々はみんな、満月となろうとしているところの月、三日月だか四日月だか知らないけれど、そういう完全性を中に宿したところの月です。キリストの光をいただいている。これが

「父の全きがごとく全かれ」

ということ。

「キリストという、父の全き存在を受けとれ。そうすれば、全きを、ちゃんといた

だくことになるぞで」

ということですよ。

